



年 組 名前

道新 ワークシート



④

ニセコ地域のリゾートエリアから、車で15分ほど離れた後志管内のニセコ町富川地区。羊蹄山とニセコアンヌプリをともに一望する高台に、西洋風の一軒家がたえず。

外国籍4.7倍に

オーストラリア出身の

A さん

(48)は2017年、シンガポールで経営していたIT企業を売却し、それを元手に妻 B さん(46)と、5歳、10歳の2人の娘とともに移り住んだ。「自然の中で子どもを育てたかった」

初めてニセコを訪れたのは、移住先を探していた15年。冬だけでなく、緑豊かな夏の風景にもひかれた。何より母国の出身者が多く、英語だけで不自由なく生活できる環境の良さが決断の背中を押した。

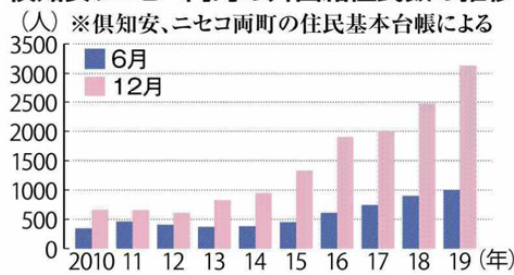
倶知安、ニセコ両町の外

移住者増 地元民転出も

国籍住民数は、冬季に働きながらスキーを楽しむ季節労働者の転入により、昨年12月末時点で3132人と10年対比で4・7倍に増えた。春に大部分が帰国するものの、6月末時点で比べても10年に346人だった住民数が19年には999人になった。通年移住者の統計はないが、海外から移り住むケースも「年々増えている」(倶知安町住民環境課)という。

真狩村に近いニセコ町近藤・豊里両地区では、約20年前から主に日本人の移住者が増えている。地元不動産業者によると、当時全体

倶知安、ニセコ両町の外国籍住民数の推移



一方で、リゾート開発に伴う急激な環境の変化に戸惑い、住み慣れたマチに見

マチに見切り

悲鳴です」。想以上の増え方。うれしい

の約2割だった移住者が今では8割に上り、特に30〜40代の子育て世代の転入が多い。最近では宿泊施設の建設工事が相次ぎ、リゾート関連の高い労働需要が外国人のみならず国内の移住者も呼び込んでいるようだ。地区内の近藤小学校の児童数は、16年度の12人から19年度は29人になった。町全体の児童数も過去5年間で3割以上増加。クラス数の増加を受け、町は本年度給食センターの増築工事も着手した。町担当者は「予想以上の増え方。うれしい悲鳴です」。

切りをつけて他地域へ転出する住民も少なくない。昨年10月、ニセコ地域最大のリゾートエリアの倶知安町ひらふ地区で、日本人スキー客に人気があったペンション「陽のあたる場所」が26年の歴史に幕を下ろした。オーナーの C さん(56)は「常連客がスキーを楽しめる環境は、ここにはなくなった」と語る。夏は複数の同業者とともに受け入れていた首都圏からの修学旅行生、冬は常連客に支えられた。だが2000年代に入り、オーストラリアを中心とする外国人が増え始めると状況は一変。日本人経営の宿は外国資本に次々と買収され、高級ホテルなどに姿を変えた。バブル期に宿を始めた経営者が高齢化を理由に、土地・建物を外国資本に売って他地域に移るケースも多く、最盛期で100軒を超えた日本人経営の宿は数軒に減った。ひらふ地区の地価の上昇率は4年連続全国1位で、

実勢は「坪単価80万〜100万円(地元不動産会社)にまで高騰している。Cさんは「不動産価格が上がったことも転出を後押しした」といい、売却資金などで恵庭市にカフェを開業する予定という。

倶知安町中心部でも近年、長年住んだ土地や建物を売却して小樽や札幌に移る住民が後を絶たない。北海道新幹線の延伸に伴って立ち退きを迫られる約100世帯のうち、町内に移転するのは「全体の4割ほど」(地元町内会)だ。延伸区域内で40年以上暮らす D さん(84)は小樽市内への転居を選んだ。地価が上昇し、建設コストも割高になった町内に住むより、同じ費用をかけるなら小樽の方がより高機能な家に住めると考えた。

「住み続けたかったが仕方ない」とDさん。急速に進むリゾート開発は町の風景だけでなく、そこで暮らす住人の姿も変えている。(高橋祐二)



年 組 名前

道新で ワークシート

①オーストラリア出身のAさんがニセコに移住を決めた理由を、自然と生活環境の面でそれぞれ答えなさい。

自然：

生活環境：

②住民が住み慣れたマチに見切りをつけて他地域へ転出する理由を、記事から探して書きなさい。

③あなたはこの状況についてどのように考えますか。